

鄧小平再復活問題の焦点

中国内政の重要なカナメ

活きた「捨て石」

華国鋒政権下で国内政治の土台をしっかりと打ち固めねばならない中国で、このところ、鄧小平再復活問題が重要な内政のカナメになりつつある。まったく、鄧小平氏その人のしたたかな政治的個性に驚嘆すべからざるであらう。

だが、ここ一、二年の中国内政の潮流を冷静に見定め、とくに昨春の「走資派」批判キャンペーンの無理と天安門事件にあらわれた中国民衆の自覚的な政治選択の方向性を顧み、そして、鄧小平氏のこれまでのキャリアと中国共産党の党内事情を考慮すれば、たとえ「四人組」の一網打尽というドラマがなかったとしても、毛沢東以後の時期に、再び鄧小平問題がクローズアップされるであろうことは十分予想できることであつた。

これまで、私がしばしば述べてきたよう

に、鄧小平氏自身、そのような時期の再来を確信していたがゆえに、「四人組」による「走資派」批判に際しても「最後まで悔い改めなかった」のであり、また、天安門事件直後の中央政治局会議で彼のすべての職権が剥奪されたとき「反革命分子」と規定されたのに党籍だけが残されたのは、来るべき毛沢東以後の時代への「捨て石」だったのである（より正確には、当時の状況

下で、鄧小平氏の党籍は残さざるを得なかった。つまり党籍まで剥奪してしまうことは当時の党内の力関係において「四人組」にもできなかったのであらう）。そして、その「捨て石」は、いま、たちまち活きたきたのである。

なかでも、この一月初旬以来、亡き周恩来首相を追慕する中国民衆の心の傾きが、さらに大きな政治潮流となって広まろうとするなかで、鄧小平再復活を要求する壁新聞が散見されたことは注目すべき現象であ

った。「走資派」批判キャンペーンが拡大していった昨年の今ごろと比べると、隔世の感があるが、このような現象は、中国民衆が周恩来路線の遂行者としての鄧小平氏に並々ならぬ期待を寄せていることを物語っている。このような民意を党中央も無視し得ないだけに、すでに「鄧小平同志」という呼称が復活し、問題は「人民内部の矛盾」であつたという論理上の修正がなされ、さらに、中国政府外務省スポークスマンなどは、鄧小平氏の近い将来の再復活を示唆したのであつた。

華体制に大きな波紋

しかし、鄧小平氏はすでに「党第一副主席」に就任しているとか、政治局の「顧問」に就任しているといった情報に対しては、これまでのところ、その都度、中国当局は否定しており、現実には、鄧小平再復活問題が、そう単純な問題ではないことを示している。

もとより、過般のドラマチックな北京政変の背後にも「鄧小平の影」を感じてきた私としては、すでに天安門事件の「反革命分子」が正当化され、事件を鎮圧した者た

ちが極悪非道の「反革命分子」として断罪されている今日、路線的には周恩来・鄧小平路線ないしは、いわゆる「走資派」路線＝「四つの現代化」路線が完全に勝利したものとみなしている。しかも、これまでの鄧小平氏の言動からして、たとえば、いわゆる「白猫・黒猫論」や、いわゆる「階級闘争ア・ヘン論」をあえて毛沢東主席在世中に公言したりする個性にも示されるように、彼は路線上の使命感には燃えていても、個人の地位やポストには意外に虚心であるような気がする。

一部には、鄧小平氏が再復活に際して、党副主席、國務院（筆頭）副総理、人民解放軍総参謀長といった失脚前のすべての要職、ないしは文革期までその地位にあった党総書記といったポストを鄧小平氏が要求しており、こうしたポストの問題で再復活が遅れているとの見方もあるが、私はそのようには見ない。むしろ私は、今日、鄧小平再復活の時期、その態様、公式にも再復活すべきか、今後も当分「鄧小平の影」として存在すべきか、といった重要な決断のフリーハンドを握っているのは、ほかならぬ鄧小平氏自身ではないかとさえ考えている。

それほどまでに鄧小平氏の存在は大きいといえようが、それだけに、鄧小平再復活が華国鋒体制に投ずる波紋は大きいといえよう。

五六年当時の路線へ回帰

今日、華国鋒政権は、一方で「四人組」の「悪業」を連日暴露し、他方では毛沢東路線の継承を誓うとともに、華国鋒主席への英雄崇拜の兆候も目立ってきている。だが「四人組」へのこのような非難は、いくらか実をもうけても、結局は、文革否定へとつながり、「社会主義社会での階級闘争」を絶対化しはじめてからの毛沢東路線への否定につながる。毛主席最愛の妻であった江青女史への罵言も、それだけ毛沢東主席の権威をそこねることになる。

このあたりに、華国鋒体制の深刻な矛盾があるのであり、このような矛盾のなかで自己の正統性の原理に悩む華国鋒体制は、今日でも、党中央委員会や党大会ないしは全国人民代表大会で認知を得ていないのである。これほど重大な政変がありながら、党中央委員会さえ開催され得ないところから中国の当面の問題の宿根がある。

このような矛盾のなかで、鄧小平氏が内

外の注視のさなか再復活することは、華国鋒主席にとって、おそらく望ましくないであろう。しかも、ただでさえ正統性の原理に悩む華国鋒主席としては、昨春の天安門事件直後の中央政治局会議で「毛主席の提案により」鄧小平氏の失脚と華国鋒氏の党第一副主席就任を「四人組」とともに決めているのだから、鄧小平再復活は華国鋒主席の責任をも問うことになりかねない。すべてを「四人組」の「陰謀」に帰すこともできようが、やはり天安門事件以降、事態の深刻さに気づいて急速「四人組」から離反していった華国鋒主席のたどった道のりにも問題は多いのである。

おそらく「鄧小平の影」がそうさせたものと思うが、毛沢東主席の一九五六年当時の論文「十大関係論」が昨年末はじめて公表され、中国内政は鄧小平氏が最も活躍した五六年当時の方向へ回帰しようとしており、いずれにせよ、周恩来・鄧小平路線の勝利は明白である。この勝利をどのような形に表現するのか、天安門事件一周年に当たる今春の清明節前後の動きがとくに注目ししよう。

〈東京外国語大学助教授 中嶋嶺雄〉